さいたまここに人あり

同僚同士、スクラムを組んで

聖学院大学学長

姜尚中さん

この20年あまり、「グローバル・スタンダード」に合わせて、学校や社会、そして子どもたちも〝右へならえ〟をしなければならない状況がすすんだと言う姜尚中さん。教育は、権力関係がもっとも少ない、それを可能な限り除外して、先生と生徒の関係が人間的な共感でつくられていくのが本来の在り方だと言います。現場では、教職員への負担が増大しています。こうした待ったなしの状態で、学校という現場で、教職員がどう子どもたちと向き合ったらよいのか、今年4月から聖学院大学（上尾市）学長となった姜尚中さんにお話をお聞きしました。

幾何級数的に増える仕事

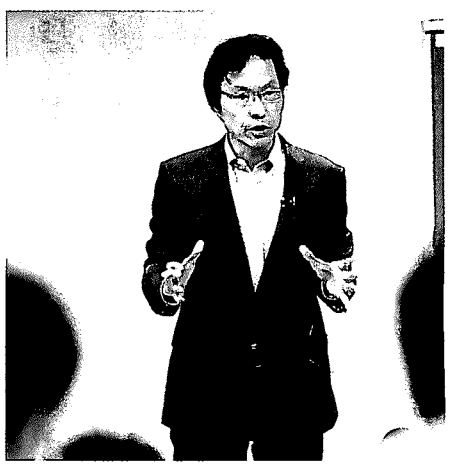
大学もそうですが、いま教育現場で幾何級数的に仕事が増えています。それはどうしてかというと、ひとつは学校を地域・社会にひらかれたものにする、という社会的要請。それから、家族、地域、社会、国、企業、メディアなど学校外の制度や機関、組織からのまなざしが、これまで以上に学校に注がれています。学校ほどメディアや世論が関心を持つ社会はないんです。その背景には、少子高齢化もあると思います。高学歴化した親たちは、直に我が子のキャリアと結びついている学校に、関心が高まってくるわけですね。

そして、教育が政治の最大のアジェンダになってしまったんです。つまり、政治家にとって政治を動かすときに、教育ほどもってこいの舞台装置はない。ですから、多くの政治家の方は、かならず教育問題に口をだす。そういうさまざまな外力、そして内側からの力が現場の教員にかかってくる。そのなかで教員は、子どもたちと向き合わなければいけないわけです。

そうすると、学校現場で何が起こっているか。たとえばIT化。ソフトの開発や情報の管理、それからコンプライアンス。問題が起きた時に対外的にどうするかという問題。そしてさまざまなクレーム、進路指導、それにともなうこれまで以上に煩瑣な仕事が増えていくわけです。

瑣末主義、トリビアリズムですね。イデオロギーや思想ではなくて、ありとあらゆるところに瑣末主義がはいりこむんです。5秒早いとか、1点上がるとか、45度の角度であいさつしなさいとかね。学校はイデオロギーに負けたんじゃなくて、瑣末主義に負けたんです。

日本はリハーサル社会ですから、それが一番よくあらわれているのは、入学式と卒業式です。どういう姿勢でどういうあいさつして、何歩下がって、こういうことを何度もリハーサルさせる。そこで失敗したらなにか命取りのような、そういう瑣末主義に全神経を吸い取られていくんですね。



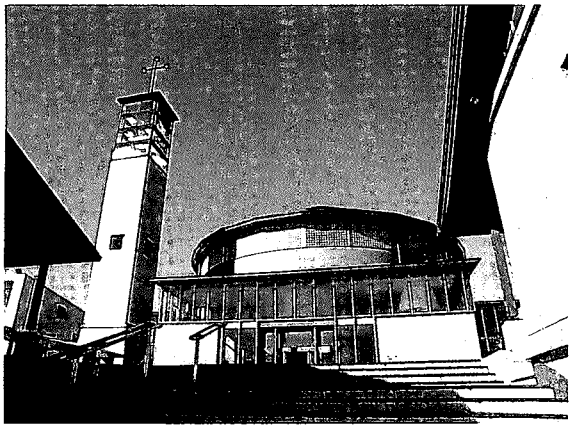
そうすると、理不尽なことが起きても反発する力が起きない。むしろ、五人組のように「この先生がこういうことをしたから、自分が割をくっている」というようになりがちです。同僚としてお互いのミスをカバーしていくというよりは、ゼロサム的な発想になってしまう。

ですから私はまず、学校の現場で横の関係をしっかりとつくれるかどうかが一番重要だと思います。同僚同士がしっかりとスクラムを組んでいれば、瑣末主義に対しては「適当」にやれると思うんです。

一人で悩まず同僚同士で話しあう

学校現場では、職員会議が有名無実化するとか、教員同士の間になかなか信頼関係が構築できないでいます。そういう学校は、必ず生徒に負荷が加わると思うんです。だから、今後どんなに負荷や管理が強くなっても、教員同士の関係をどうするか、それがまず第一だと思います。

そういうなかで、やっぱり子どもたちこそがステータスホルダーになると思うんです。彼らを第一に考えなければならないのに、いつのまにかそれが二次的な問題になって、教職員の職業上の業務遂行の利便性とか遂行性とか、できるだけトラブルのないように、となる。そうなると、問題を起こしている生徒はできるだけいなくなってほしいというふうに傾いてくる。それは、非常に問題だと思います。



第二は、子どもがたとえトラブルを起こしていたとしても、そこには必ず子どもでは対応できないなんらかの問題があると思います。

学校で低学年の頃から荒れたりする子は、メンタルの面で不安定な子もいるかもしれない。ただ、かなりの部分が低所得や離婚やあるいはそれにともなうさまざまな不和が背景にあって、それが子どもにのしかかっている場合があると思うんです。

教員一人ひとりがその問題にどこまで向き合えるのか限界もあると思いますが、一人で悩まない。問題を同僚同士で話し合う、それができている学校は、どんなに上からの干渉があっても耐えられると思います。

それから三番目に、私は教育は顕徳ではなく陰徳だと思います。つまり、成果は10年、20年後に出てくるんであって、いま自分がやっていることがどうもうまくいかないと思っても、「教育は陰徳だ」と割り切った方が良い。教育は一年単位で成果を出せとなると、必ずこれは間違ってしまう。どんなに圧力があっても、本音の部分でどこまでそれを信じることができるか。ここでも、同僚同士の関係が非常に重要ですね。

実地、実物、実感を大切に

それから四番目は、保護者との関係です。保護者が教員に求めるものは、本来教育の在り方からすると、そぐわないことが多いわけです。そのときに、教員は

どう対応したら良いか。これは難しいですね。ただ、教室などで楽しんでいる、笑いがある場面を確実につくっていければ、それは必ず保護者に響くと思います。

正直言って、大人でも30分間こちらを見て話を聞いてもらうのは難しい。ましてや、中高生にとっては難しいですよ。どうしたらいいか、私はビジュアル系の教材を使って、工夫するしかないと思うんです。黙らせようと思わないで、子どもは興味のあることには必ず目を輝かせてくれるので。必ずしも教室だけで授業する必要はないんじゃないか。

そして一方的に「黒板を見ろ」と言わない。若い人の身体感覚が変わってきたと思うんです。ひとところにじっとしていられない。多動的になっている。まあ、大人もそうなんですね。だから、場合によっては外に出る。

実地、実物、実感。とくに小学生、中学生は、実地で何かが伝わる。たとえばある場所に行けるならば行く、それから実物があれば手に持って触る。それから実感ですね。子どもたちは、実感として持つとすごく伸びるんですね。

私は、埼玉は一言でいうと首都圏で、しかしいわば農村的な部分と急激な都会化した部分、それから外側からの住民の移動や流出が激しい、流動性が非常に激しい地域だと思います。こういうなかでしっかりと地域に根ざして、どうやって子どもたちが育っていくかと考えざるをえないと思います。

家庭の実態をつかんで

最後は、プライバシーの問題もあると思いますが、私は家庭は一つひとつ違うというつもりで、まず家庭の事情を可能な限り的確につかんでおくことは必要ですね。

いま、生活保護世帯が増えてます。残念なことに、「教育の世襲化」が起きているんですね。親の学歴、職業上のステータス、資産、それから所得。これがだんだん固定化されてきましたから、同じ学校に通っていても、親が子どもをみる余裕のない家庭と、かなり所得水準が高くて教育に熱心で子どもを塾に通わせるような家庭、明確に学力が変わってくると思います。

それから非常に露骨な言い方をすると、親たちの「『腐ったリンゴ』をそばに置いてほしくない」という思いです。自治体がすでにそういうふうに動きだしているんですね。これは、大変なことだと思います。問題のある子を学校の現場から違うところに移してしまうということですから。真面目にやろうとする生徒や親にとっては迷惑至極という、そういう発想が強くなってきている。それはどうしてかというと、社会がそうなっているから。その最大のしわ寄せは、子どもたちが背負っているということです。

いまあまりにもグローバル・スタンダード、グローバル人材と言われていますが、それはごくごく１００人のうちの数人の話です。高校時代から有名高校に行って、海外の有名大学に行く、そんなサクセスストーリーばかりをメディアが大々的に流しますけれど、あまりにも実際の現場で起きていることを知らなさすぎると思います。

子どものなかの「どうせ」という考え方、それから「なんとなく」。これは大

学生のなかに多いんですよ。この「なんとなく入学」して「なんとなく卒業」、「なんとなく就職」する。悲劇的なことは、「なんとなく中退」です。7割は非正規雇用のサイクルに入りますから、ワーキングプアの予備軍だと思います。

埼玉県でも修学旅行にいけない貧困の家庭があり、結局学校を辞めるという子もいると聞いていますから、我々としてはなんとか中途で辞めないように、先生方の努力は必要ですよね。どんな人間にも持って生まれたプライドがあるし、その人を慮って、心を開いていかなければなりません。

悩んだときは子どもを見よう

いま、教育改革がすすんでいます。そうすると、かなり首長裁量権が強くなります。評価や締め付けが厳しいところは、教員にも圧力がかかってきますよね。

最大の問題は、教員のアセスメントです。たとえば、「どこそこ学校にどれくらい進学できたのか」、あるいは「どれくらい中退者が出たのか」ということですね。あとは、学習の進展度がどのくらいなのか、学級崩壊していないか。それから、学力テストの公表、これはかなり大きなプレッシャーになるでしょう。教員のなかには、相当なストレスで、子どもの不登校以前に先生が不登校になってしまうというようなことが起きています。

もう一つ、そういう意識はないと思いますけど、社会にはまだ残っていると思う「聖職意識」。「教師は聖職である」という。私はそれに対しては、とても疑問に思っています。本人がそう思って、自分のミッションというものを強く自覚していることはいいかもしれません。しかし漠然とした「教師は聖職だ」という考え方が、ものすごく教員自身を鋳型にはめている。もう少し考え方を変えていかなければいけないと思います。

教員一年目の人のなかには、理想とは違うと悩む人も多いと思うんです。ここで一番大事なことは、「子どもを見よう」ということ。いろいろ苦しいときは、上司や校長、教育委員会、そういうところに目が行ってしまうんですが、生徒を見る。その笑いに助けられるということがあると思うんです。

子どもが一言感謝を言ってくれた、それが支えになる。私もそうでしたが、子どもから手紙が来たり、突然訪ねてきたときの喜びは、かけがえがないでしょう。これはお金にかえられない。その喜びをかみしめてほしい。2、3年は大変かもしれないけれど、5年、10年後には必ず、という気持ちでやってほしいですね。